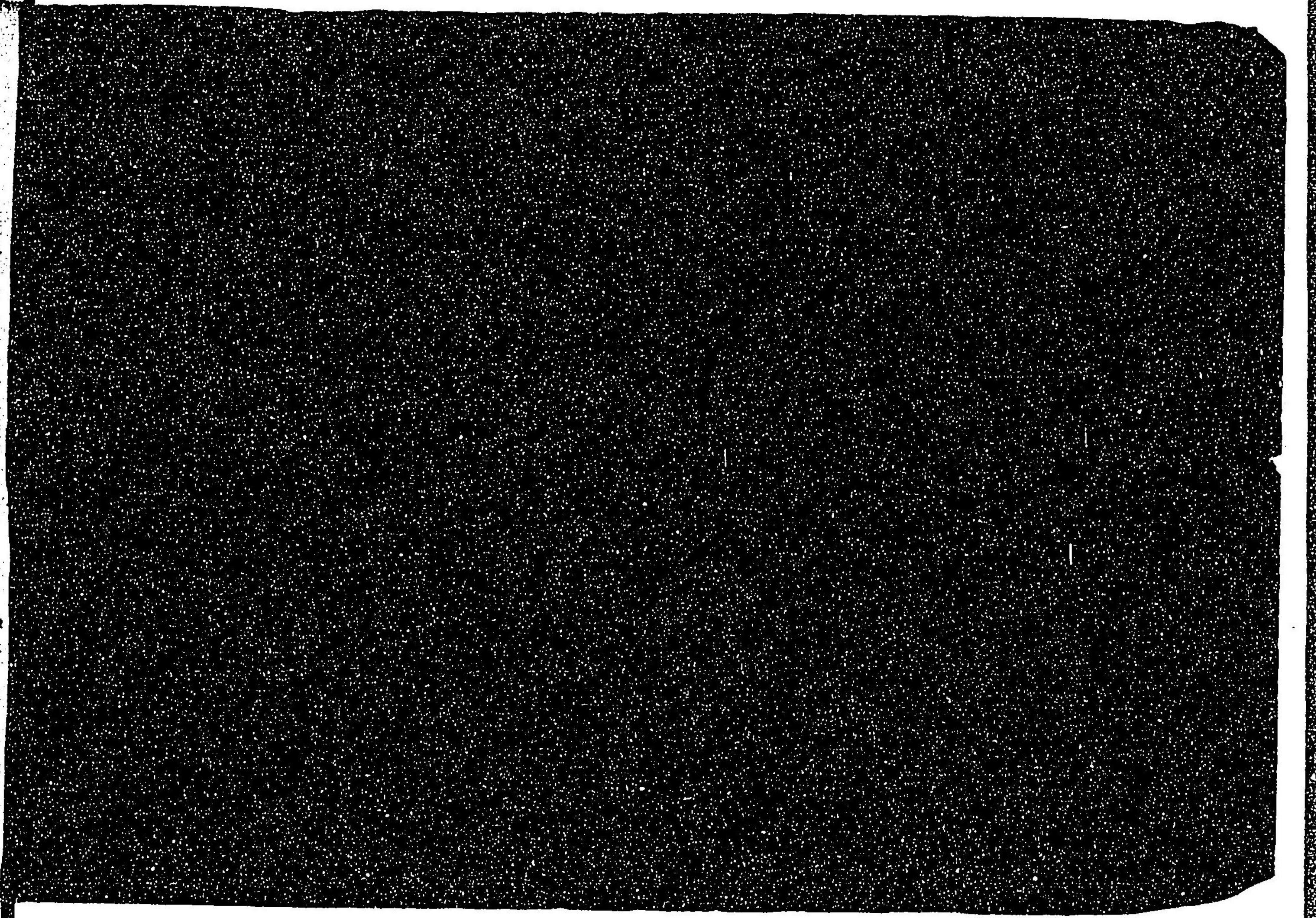
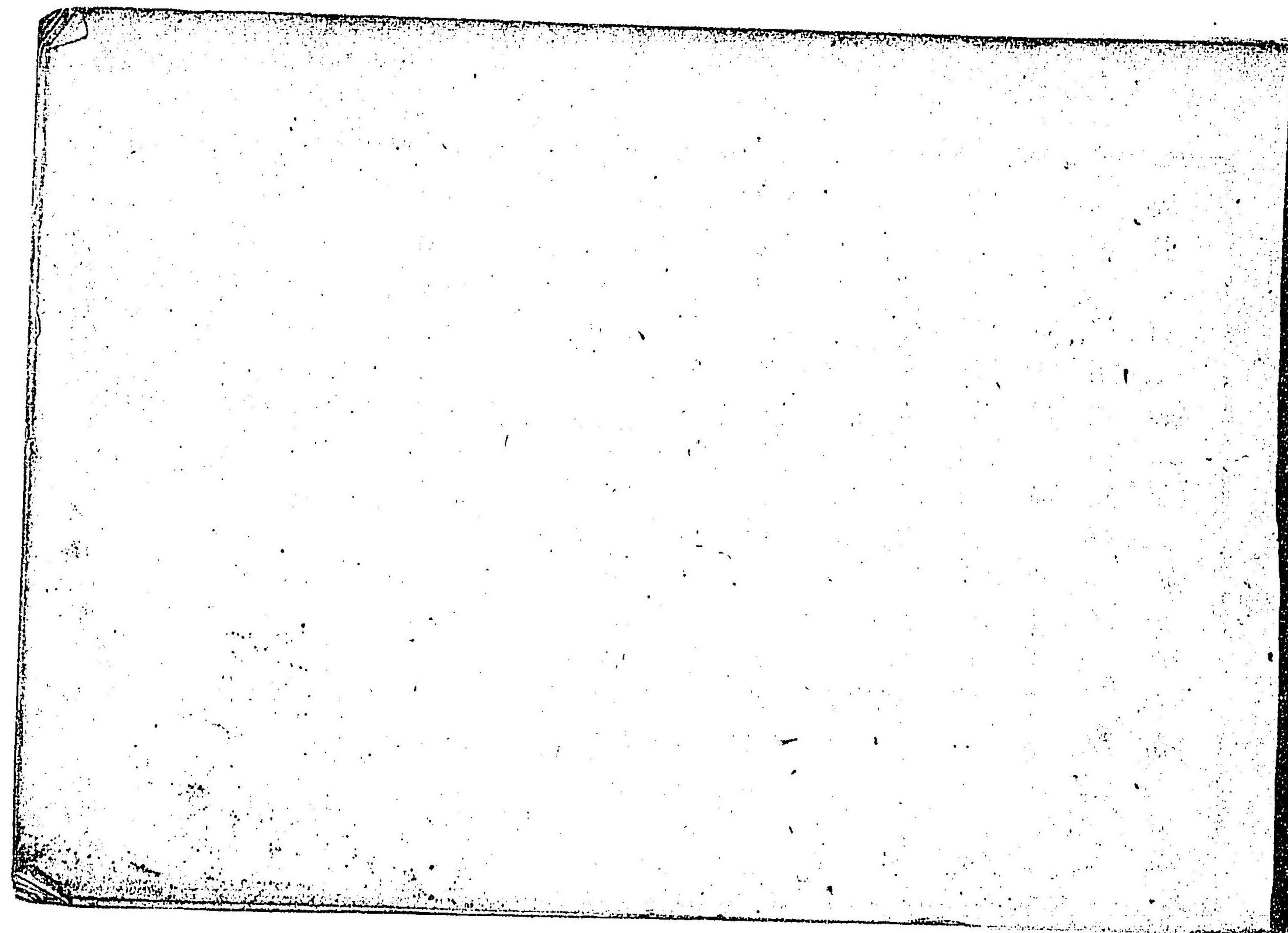


俳優評判記

第十八號

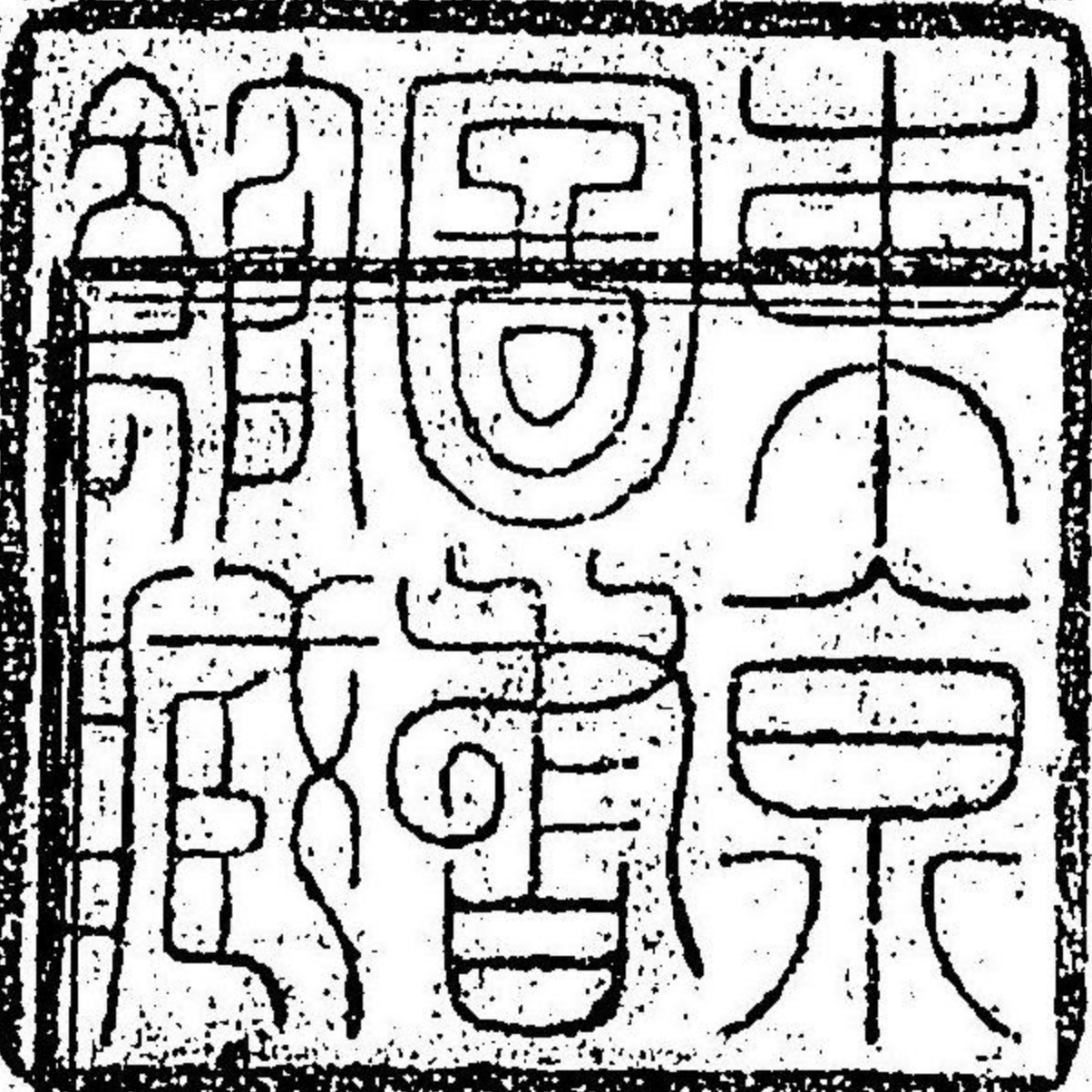
特57

537



入楚の硯の海二編三編四季の花ながめ  
 又飽ぬ定連の情衆合て興行毎も眼も移  
 り香を心も貯へ年々歳々去としも又去  
 年より摘し言の葉を土筆の頭をかき集  
 めし此評判記の號數もお家物の十八番  
 家よ居なげら名所を知る歌人よわらで  
 歌枕實地を見て來て善のよし悪きいお  
 しと定めたる眞上々の吉書よこそ  
 斯れふ八文舎が黒表紙の口序を眞  
 似る

看倣ひの聲色遣ひ 猫々道人魯叟



撰者 高須高燕  
 補助 梅素 六二惣連

俳優評判記第十八編序言

歌人の居ながら名所を知るの影芝居の  
聲色を聴て俳優の高下を論ずると同一  
般能因法師が陸奥に行かて白川の關の  
詠歌ありし等類よて有名無實是なる可  
し夫劇場の遊覽なると俳優の浮遊なる  
いふを待たず然れ共活眼その所よ注  
けば一日の脚色一生の如く榮枯盛衰  
善懲惡且暮よして全きこと壺中かのづ  
からの小天地喜怒哀樂の四情を離れず  
故に時好又随ふてそゝるに人の感覺を  
起さしむること劇場ふあり狂言の虛を  
るを見て綺語の實なるを曉る者即ち見  
功者と稱せん歟六二連の老長高燕叟  
よ同好砂庭主と共に計り洒落と懸み半  
分俳優評判記一帙を著されしよ瓊江

○新富町猿若座藝評

太平 諷 黒白論織分博多 七筋  
邪正賞罰

第二番目 偽甲當世簪 三本

熊坂蘭平の狂言よ

よする常盤の松 常盤津連中  
三人漁師の水竿に 竹本連中

よする岸澤の竹 市川左團治 澤村源之助  
中村福助 岩井紫若 中村芝翫

壹番目二番目の問よ相勤申候 長唄とやし連中

歌舞伎 十八番の内 矢の根 興行 市川團十郎

大薩摩初音太夫連中

市川右團次

○安陽寺の紅養和尙役序幕安養寺の場拵へは是迄(故人  
小團次)今の(菊五郎)の仕られし少し老僧の作よて眉  
毛を太く仕られ升たの僧柄の至極道徳作て大さよ能ムり  
升た袈裟衣の好の一通りよて評なし○大主貞行(海老藏)  
の小性要人(紫若)を見初て召抱んと云を彼是事に諾義  
論をする處の申分なし道具替つて居間の場要人が千川郷  
藏(團右衛門)よ乳房をさぐられし事を語るよ驚き後難を

恐れ門番空藏(猿十郎)お親彌平次(團十郎)を呼よ遣り要  
 人を預ける事を頼み逃す處にさらくと仕られ別お斯と  
 評する處をし○要人を出し遣我身よ難義が掛りいか成責  
 苦よ逢んも知ぬと覺悟の見得よて道具廻る處に一寸應へ  
 升た○二幕目拷問の場拵へ月代も延髭も生たる處に余  
 り日敷の立過た様も思ひれ升たが先見た眼の大きよ裏  
 弱が見へて能ふり升た重太夫(左團次)よ尋問請云譯くら  
 く成たる處より法衣を刷れ白潮へ突落され繩よ掛る時其  
 驚き方仰山ふて狼狽する處に余りと申せば意氣地なく安  
 養寺の場よて責苦よ逢事も覺悟したせりふも有一休此紅  
 養の紀井谷安藏守の遺子よて本文で見ると至つて強勇の  
 僧ふて平凡の柔弱僧の氣持よて仕られて大層腹が違升  
 ふ○郷藏の折檻よ逢處も打る、度毎に苦しがり様も余り  
 仰山過て甚悪し斯鼻の先の振事斗りよ身を入ずよ此紅  
 養の身柄の堂云出生の者と云處へ眼を付て仕て貰た物  
 なり拷問を成丈こらへて痛がらぬ様に仕たい物てふる○  
 されば後に貞行どの仇敵なる紀井谷安藏が血統なりと名  
 乗處も一向引立すおし事なり親御が仕られた時のいか  
 よも由緒有僧共おもれ殊に此仇敵なる貞行に斯る責苦  
 よ逢の残念也と憤る處の凄身と云物の何共云様の無程手

強かつた物で有升た□其上解せぬ事ハ口くら血を吐れ升  
 たが舌でも喰た事かと思つたらさうでもなく駄を叩かれ  
 たどて咄血とるの随分わからぬ仕打なり○當狂言ハ此紅  
 養上人が騒動の種よ成大事な役なるに大きよ息込が違て  
 遺憾な事で有升た其上先狂言の時より紅養の役も悪く成  
 て居ると云物の本統お女犯の僧お成て居る筋ハ本文おも  
 組語して是でハ大層愚僧よ成てあわれ身の無なり升た先  
 此役ハ骨折て仕られ升たが骨折處が違て上評どの申せま  
 せぬ残念く

○淺川主水役席幕花菱屋の場忍んで小女郎に逢よ來る處  
 今少し色氣ケなしハ様で有升た拵への通常よて評とる處  
 なし小女郎(さう調)の外へ身請と仕らるゝと聞ても金お  
 詰り我方へ身請すると云譯よも行す小女郎の身を投て死  
 んと云手詰の處へ松下珍阿彌(鶴藏)出來り三百兩と云金  
 を貸て呉て小女郎を請出す事よ成悦ぶ處も只さらくと  
 仕れて評なし○此金の全く我用立し也と浦橋(左團次)が  
 出て來り是をおとりよ万石積の大船の圖を望するゝに無  
 余儀請合處までさしたる事なし○筑紫御殿諫言の場鳥山  
 大膳(團十郎)と大船造營の問答の處もさしたる事なし□  
 (左團次)ハ重太夫おで此人と並んで出遣入お駄をすへて

歩行るゝに(家升丈)肩を振て歩行るゝ故見た處の安ッば  
 く見劣りケ仕升た其内より心付て肺のこなしも直り升ふ  
 とふを早く東京風に成るゝ様待て升く〇同じく城外  
 闇計の場此場の見物が待て居升たが先拵へケ大不評黒の  
 頭巾の冠り様も顔を丸で出して甚だ悪し(是は大坂風で  
 兎角見物へ顔斗り見せたがつて困る)着附の黒襟の掛つ  
 て居處の下着と見へ升た是を本水で肩の處を濡して雨お  
 濡た心持の五注意扱白博多の帯に白縮緬の下帯の下りの  
 何事余りと云へば氣なしの好み〇刀をかざし切て廻る搦  
 梅も随分下手な仕様眞影流の遣ひ人と云るゝ大勝の言葉  
 も有に今少し堂か工風も有べきに〇ト、大勝も取て押へ  
 られ異見と仕られ突放され花道へ行頭巾と取て舞臺を拜  
 み辞儀を仕られ引込お升たがなせ頭巾をとんなすつた  
 物が苦くし事〇後に此頭巾を取あくなつたとの噂  
 又白博多の帯も淺黄も變つたとの事故見留に行積の處俄  
 お千秋樂も成升た故再び見す依て此噂も保証せず〇尤も  
 此頭巾を取事も心中に悔悟したる腹を聞せる處へ強ち  
 さう悪く斗りも云へ升まぬかとも思ひれ升只東京の藝風  
 からのへ悪み共云べし大坂風でいへば藝が小まかぬと  
 云べし爰らの眞眞眼も依て彼是の評の立處也〇内の場花

道が歸つて來る處羽織袴の拵へ誠立派過升た様なり星  
 野東右衛門の異見より三百兩の金を星野より借て浦橋  
 へ歸し切腹すると云場此人の場にて手一ぱみ仕て見せ  
 られ升たが先一通りよてよし〇仕打よおめて申分なく  
 殊も此人よとまつた役故彼是評と下す處も無ですが何分  
 眞身入と見物を泣すと云處もなく出來たる脚色故今一息  
 喰足らず夫故り感伏する場もみへす思へば残念な事なり  
 〇扱此主水と云役もつまらん役よて最初浦橋より金を借  
 小女郎を請出し女房よなし此恩義お依て重太夫よ一味し  
 大恩の有だ膳を開殺せんと迄して取て押へられ異見され  
 夫が少柄を落したを証し星野よ談事られ又此星野よ三百  
 兩金を借て浦橋へ歸して切腹すると云筋なるが始終人に  
 よつて我と働かせると云の随分意氣無の侍ひ夫故折角身  
 を入て仕られても役引立す今一息ヤンヤと見へぬの全  
 く役の悪みので有ませう次の替りの何ぞ得意の狂言よて  
 腕前を見度な

市川左團次

〇浦橋重太夫役厚幕博多花菱屋の場淺川主水よ万石積の  
 大船の繪圖を引せんと珍阿彌(鶴藏)と計り主水よ三百兩  
 の金を用立遣り義理詰よして繪圖を引事を頼るゝ處拵へ

万端申分なくいかよも心よ一物有重役との見へ升た殊よ忠義の爲し船を造營すると云説論の處あれでし主水も一ぱい喰た郎と見へて大出来〜〇廓歸りの塙廻屋ヶ燈灯の火を借に行内齋より下る處へ彌平次(團十郎)要人(紫若)出来り一寸だんまり成處沈着たる仕打大舞臺じやと申升た

〇二幕目拷問の場繼上下の拵へ人品有て吉紅養を呼出し要人の婦女なる事証據を以て尋問の處臺詞廻し和らかま説論する工合いかよも威有てよく此處何共云ぬ程宜ムり升た〇重ね掛て吟味するも陳じて白状せぬより次第は聲を張上責問以後三衣を刷せる處の實は感伏の事有升た此場の貫目の實惡の位置の確な物五出世〜〇紅養の居間を吟味いたしたる處斯様な刀箱ヶ有しと足輕が持來るを改め見る處岐井谷安藝ヶ讓狀の有る其素性を責問處も沈着て申分なしト、鉛の煎湯を以て責んと身事度をする處よて幕此場り(廷升)丈實は大出来有升た〇彌平次内の塙要人のお秀を召捕來る郷藏の跡ヶ出来り郷藏を歸し是より彌平次とお秀を説てお妾よ上させる處さら〜と吉〇浦橋の惡事を懷中物の密書より彌平次ヶ覺り要人(紫若)彌平次(團十郎)と三人だんまりのくだけ成處よ

かつたぞ

〇三幕目浦橋邸宅の塙船大工棟梁作藏(荒次郎)が船出來の禮よ來り音物を出すを受る處より高崎幸右衛門(鶴藏)が加増の禮に來り懸節箱を持參する〜請らるゝ様子も何もさして仕業も無れと出頭職の直打備り申分なし〇爰へ只村彌平次(團十郎)入來りお秀の方の親風を吹し殊に浦橋有連判狀を無理し取置我儘を云を休よくおひしらい居る工合大出来〜後五拾兩の無心を無據貸して遣送(三升)を向ふへ廻し此位は貫目を見せて仕てゐらるゝの實に感伏の事有升た〇御殿の塙殿のお召よ(右團次)の主水と同時に出仕なし加増を給り御禮申上居處へ鳥山大膳(團十郎)出仕よて万石積の大船造營の儀を諫言なすを言破らんと大膳と問答の處能こなされ升たト、鳥山に言伏られ恐を入處もよし口新造の大船を燒却せん事を言付り御前を退出の處まで申分なし〇作屋形山の塙山狩よ事よせ彌平次を同道して日頃の身持大酒の事を意見なしても聞入ず猶連判狀を歸して呉と頼め共不承知を云て惡口なし其上不意お切て掛るよ引はづし是より無余儀彌平次を殺す處少しもぬけ目なく此場り一番目中での見處有升た〇拵へも申分なく實に今回の浦橋の中身の

出来きつと等級を上げ腕前を見せられ見物一統得心心升  
た事で云つた併し大詰の吟味の場が預りよて何か物足り  
ぬ様で不承知○中幕所作事、漁師濱太役(芝翫)(福助)相  
手、所作事のお付合せのさして食處もなぐつて只々五苦  
勞な事

○二番目、半目の長五郎役、本所石原河岸の場、女房お才を  
玉子遣ひ自分の影を隠れて喧嘩仕掛、物をいたぶる悪徒  
拵へも手拭を深く冠り目斗り出して着附も女の着物業一  
点の能ムり升た、口威心なの、幕切まで手拭で顔を隠した  
ぎり少しも顔を見せられ升ん處の中々大立者も成れ升た  
事が女愛らを見と東京ッ子のチヤキ、成れた事と最  
賃眼なし、大賛成、○二幕目、京屋の場、達方のお戈、  
菊五郎と並んでの山、松島千太と高橋お傳が夫婦も成  
たかと云悪口も有升たが随分目先の變る様拵へて居られ  
升たが何と云ても同じ風な役柄故無據な事です、○小陰  
をして好時分、女房を見付たと見世へ飛込筒持せの、す  
が、成處の手覺のある(廷升)得意の世話歌、一狂言毎、あ  
くが扱で當こみつけ、抹の兎の毛で突た程もなく申分無の  
大出来、○立度目のゆすり場もさらりと吉、大切幸治(菊  
五郎)と、喧嘩の場立廻りも例もながら(梅幸)と實地の組

合面白、事でも有升たト、探索拭お博られる處迄申分なし  
の出来で有升た

○大切十八番の内矢の根が出升で馬子畑右衛門の役を勤  
められ升たが此役の七代目兩度演されし時共(坂東彦左  
衛門)の役まで花道より大根を付た馬を曳て出て來り此  
馬を五郎も所望され渡されぬと云より一寸立廻り有て下  
手の竹敷の内へ投込れると云極、の端役を師匠團十郎  
への勤め是を引請て出られし、誠は穩當な人として感心し  
升た追々評判よく最早大建者の部へ道入れたる其身を高  
ぶらす終日の勉強實は頼母しい役者と内外ともお請よく  
次第も五出世の龍の雲井お昇るが如く、イヨ、高島屋の大兄  
イ

坂東家 橋

○龜甲屋、新三郎役、淺草奥山の場、花道の川拵へ万端申分  
なしなるが當世男よの羽織の丈の少し短いと云、投書も有  
升たが内へ歸れば目黒島の前掛をベルト云、聲さんなれば  
此位よして可成かと思われ升、○奥山の茶店よてかうらよ  
出逢、是より富士見へ行てお飯までも喰様と云迄の處のさ  
したる事なし富士見の二階よて花房幸次(菊五郎)に逢處  
もさらくと吉、○今度の役、此人おとまる様よ書た物ゆ



へ申分り無○富本淨るりよておうら(源之助)と一寸振事  
 のある處ハ持前よてよし道具替り石原河岸の場癩ハ惱を  
 居る女ノ藥を興へたる處へ長五郎後々出來り無法ノ突掛  
 る是より一寸だんまりに成處さらくくと吉□大さま請升  
 たハ此無法者に驚き懐中物を内懐ろへ入なさるハ能氣が  
 付れ升た○二幕目京屋の場達ノのお才が來り藥入を証據  
 ノ女房約束をしたと云掛を云を覺無と争ふ處ハ相應ホこ  
 なされ升た後ハ大隠居久平次ケ立腹して追出すと云を余  
 義なく内を出て行れる處さしたる事なし○道具替つて濱  
 町河岸の場不斗家出をしたる女房おうらよ出逢内へ歸れ  
 と云ハ身を投死なんと言ハ是非なく連て遊んと覺悟する  
 處へ小僧三太(團八)出來り今兩國と大橋ハ追手の者ハ網  
 を張待て居と言ハ驚き三太ハ錢を遣り内へ歸し左右の道  
 ハ追手の者よて行れず幸ハの渡し船と是へおうら下女お  
 かん兩人を乗川中へ漕出す處へ眼九郎(松助)九四六(橋  
 次)甲太(升藏)出來り此体を見て殘念ケリ石を投るを除  
 ながら船をこぐハ棹を落し板子を以て水をかき遊る處中  
 々宜こなされ評よし□船中よて肌をぬぎシャツよ成て船  
 をこぐ處ハ朝鮮仁川府の様を見せたる趣向大請く○幸  
 次内の場ハ身の納りを幸次が掛合よ行たる事を聞せる迄

の處よてさして任草もなく狂言も無處故評する處なし何  
 のしかれ今回の新三郎役ハとまり能大出来て有升た

○大切矢の根よ會我的十郎祐成役是ハ先年市村坐で七代  
 目海老藏ケ演されし時親御(市村羽左衛門)の役よて何モ  
 爰と云て見せる處もなく梅の木ノ梢へ顯れて夢中よ時致  
 よ「我工藤が館よ捕子ホ成て居る間救へと云繼か斗りの  
 役なれと拵へも古風よてよく人品も十郎適當の人故はま  
 り能大出来てムつた先方今(團十郎)の五郎よ十郎と仕ら  
 れて見劣り無と云ハお家の物と云物か爰らハ劇場中の云  
 よ云れぬ妙不思議な味ハ物と思ハれ升斯言事ケ芝居好の  
 涎とたらず處カイヨ感必く

岩井紫若

○安養寺の小性要人役筑紫天神の場小性姿よ花手桶を下  
 ての出拵へ万端申分なし爰ハ大主貞行(海老藏)よ見初め  
 らるハ處投書の内よも余り女然と仕過ると云評も有升た  
 ケ五尤もの目の付處なれど全躰女ケ小性よ成て居て爪は  
 づれの尋常あるも女でハ無かと目の付狂言の脚色なる故  
 先女らし過るの難ハ黙々よしてれくか○同じく書院の場  
 千川郷藏に無理口解よ逢乳房を探られ驚いて興へ走入處  
 ハ相應よこあされ升た○同じく居間の場紅養よ身の難題

よ成たる事を咄し歎く處相應よこなされ升た夫が親彌平次に連れられ安養寺を落行處も難なし○道具替り廊裏手の場彌平次も手を引れ出る處意氣地なく取乱したる姿の大さよよし一寸だんまりよなる處さしたる事なし□小性要人の内の中へ能仕て居られ升た○大野村獵人内の場ハ女すけたよ成隠れ居處拵へも相當よて吉腹ケ痛と云て苦しむ小親父が驚き介抱をす内紅養の死靈ケ乗うつり筑紫の家へ仇をなさんと我知らず恨みを云處ハ少しも涙みもなくチト不出來で有升た○爰へ浦橋入來りか秀よ妾奉公に出よと進める處死靈の業よて二言とも云す承引の風情の余りそつけがなく一体色氣の無性とい云ながら堂か少し色氣をふくんで世たかつた○三幕目御殿諫言の場さて爰よ至つてハ大不承知今迄小性姿や獵人の娘の内ハ堂か斯か見られ升たが奥向へ引上お妾様よすると一向貫目もなく原か新富座の顔揃ひの中へ無理なる事ハ知て居升け女形無人の折柄故爰へ居て有升け何分よも安ッボク殊よ大主の愛妾と言容色もなく持切升んでした(川竹其水)子ケ歎息よ大和屋の太夫ケ死なれてハ最早愛妾で國ハ崩れると云狂言ハ書れ升ぬと云れたと有ケ堂もまた杜若の條ケ目先よちら付て居て見劣りがして答へられ升んでし

た○佐屋形山茸狩の場も今一息舞臺淋敷老女岩波(喜知六)ケお秀の方と浦橋と密通したるを知た五十嵐(玄け松)を毒害するを愧ふ處も答へ升んでした□容色の悪いも持前故詮方なし愛敬の無も生得なれば是非もなしせめて衣裳でも張込だら如何も物足も藏衣裳故おさづけ次第と言ハ據處なし是を我儘を言權威が無と往生してムのかされバお氣の毒さま

○中幕所作事よ在原の行平役さしたる事なし外坐出勤の時分の随分目に付た當りも有升たが新富座昇進以來少し役過ると見へて當りケ見へず何分五注意が肝心今ハ大事な處で有升ぞ

市川團右衛門

○千川郷藏役席幕安養寺の場要人の素性を様さんと殿の御意を請色よ事よせ要人の乳房を探る處例もなげら斯様な二枚目敵ハ此人の事甘い物〜○二幕目紅養拷問の場紅養の女犯の罪を責拷問の處手丈夫よ仕られて宜ムり升た先方今此敵役ハ此人を退たら外に有升まハ○獵人内の場お秀を召捕に來る處ハさしたる事なし

○中幕淨るりに熊坂の手下三條右衛門の役大兵故殊の外立派に見へて吉五苦勞〜

○二番目よ久平次女房おかま役斯様な加役の余り仕をさ  
らぬ故如何と思ひ升たよ余り當込つけ杯もあく極さらさ  
らどした内よ可笑味有て至極の上評お手柄

尾上 松助

○二番目斗りへ出勤久平次の甥眼九郎役席幕奥山茶店の  
場のさしたる事をし富士見の場下女のおかん(さう調)を  
口解よツイロケ迂り鐔の新三郎を追出す内談を手くたよ  
掛り咄した處附れた上突倒される可笑味の處輕くて甘い  
事後唐木屋の番頭要助(喜知六)と内談の處を新三郎(家  
橘)よ聞れ狼狽る處羽織を裏歸しよ着て二階を下りて行  
處手輕ておかしく斯な物よ懸たら外よ仕手なし○淺草本  
願寺甘酒屋の場伯父の久平次と新三郎を追出す相談の處  
の相手(仲藏)なり古今の面白味見物一同嬉しけり升た  
○京屋の場お才のゆすりの側から能加減よ太鼓を叶き新  
三郎を追出す仕組の處も大出来濱町河岸追手の場もさら  
しとよし○再度の京屋の場伯父甥の計みかはづれ元の  
木阿彌お成おかしみの處申分なし此人よはまる様お出来  
て居る役どの申ながら又上手に仕生ずり役者の働らき大  
請

○大谷門藏) 差配人仁右衛門役長五郎と子分大勢京屋の

見世を騒がす處へ出来り仰載まは入處の中々能任て居ら  
れ升たが方今の差配人にしての舊幕時分の家主の様に役  
場半天を着て居られ升たのいかげな物

○市川猿十郎安陽寺の門番空藏紅養袴間の場へ引出され  
吟味に逢紅養の女犯を白状する處相應よこなされ升た

○中村荒次郎) 船大工榎梁作藏役出来よし

○市川團八) 花菱屋の遣り手お瓜のさしたる事なし二番  
目よ京屋の子僧三太の大出来

○坂東竹次郎) 幸治の子分さしたる事なし○仕出しの書  
生の拵へよく評よし

○市川升藏) 烏山の下部○京屋の職人さしたる事なし

○尾上尾登五郎) 長房の子分相應よし

○坂東橋次) 仕出しの書生出来吉○京屋の職人さしたる  
事なし

○市川小半次) 半目の子分出来吉○市川左伊助) 甘酒屋  
の婆々こんな變り物の例も出来され升○中村翫八) 蕪太  
郎の代り役五替勞し○此外相中役者の評略す

尾上 菊之助

○富士見の娘お梅役されいし富本浄るりの端唄にて振  
事廿の事遣れ升た此頃子役にの大き過ぎる様もなられ立役

の部には役ケなし先小娘の役でもあてがひ勤めさせる事  
と見得市村座にても娘二役何れも可成よこなされ升たか  
何分音聲ケつふれせりふ通らずれしい事で有升爰を押し通  
し突込で遣るればやがて宜調子よなられ升を勉強ケ肝要

尾上菊五郎

○飛の者長房幸治役富士見二階の場拵へ万端申分なし當  
番つなぎの着附に羽織の唐棧縮襟へ長房の法華の珠数を  
掛たる好み日本橋邊の頭取と云拵へ梅幸得意の大いなせ  
實に斯様を役も掛たら外は類と眞似事の無いまり役丁度  
富士見の二階まで自分ケ仲人をして縁付た京屋の聲新三  
郎も出逢一盃始ると云處万々行届たる任打申分なし此場  
にて富本豊前様久々に新富座出勤の口上自分もさり難  
き縁類なりとて太夫引付御目見得の取成御苦勞へ夫が  
太夫淨るりに取掛らせるとて樂屋へ遣り久敷逢ねへ内  
又太夫も大層ランプに成たなと一寸見物を可笑からせ升  
た斯云事ハ此人の十八番□扱梅幸子も申事でも有升んケ  
(升藏)の富士見の半天を着た若イ者まで仕出しよブレキ  
板の料理付を持て来て是け淨るり觸よなる目新らしい  
趣向なるけ此若イ者が幸治頭も新三郎も毎度の馴染にて  
此座敷も居て付て世事を云て居は眞事よ舞臺も障つて悪

ラムり升た爰らハ万事實際を見せる方今の劇場ハ不似  
合よて悪し万々世話好の八ヶ間敷屋の寺島に有まじき事  
と此處にて小言を申て置升る○其内に淨るりヶ始ると下  
より頭に清正公様よりお人が参り升たと聞下へおり際ハ  
富本の淨るりを聞て「うめへ〜イヨ柳橋と」不めて下へ  
這入られ升たの甘い物で有升た斯云氣を取た事を云役者  
ハ又と外に無不思議〜○三幕目京屋の場花道ハ人力車  
よ乗て出来り門口へ下り車夫よ酒代を遣りて歸し大層な  
ホコリだと云ながら手拭で鉢をとたく工合なぞの堂して  
も驚の者よ生れ付た人の様なり○夫より内へ這入一應の  
挨拶有て是より新三郎を這出したる始末を尋ね仲人の己  
小断りも無いと云處より掛合よ成ト、離縁よするなら持  
参金の千圓を歸しなせへと理詰よする處ハ名しれふ相手  
ガ(仲藏)なり此處ハ中々面白い事で有升た大出来〜○  
道具替り淺草橋廣小路の場ハ半目の長五郎も出つくわし  
喧嘩よ成立廻りの例もの通り(左團次)との出合故狂言と  
の思へぬ程よ面白き振事ハ見物一同大請よて嬉しがり升  
たト、長五郎召捕になる迄余ハさしたる事をし先此役ハ  
寺嶋子よはまつた様よ作た新案なればとこと言て難する  
處もなく只々感伏〜と云より外言草なし

口幸治内の場、寺嶋の山ない處なれど、爲の者の頭、内  
道具方、コツテ拾へて有升た、門の格子口も例も、處  
でなく正面を向て至極目新らしい趣向で有升た、此門口  
は法華の信者なれば、清正公の講中の札をはじめ種々をお  
札をかけて置度思ひ升た、爰ら、遺憾な事、有升

○長五郎女房達、才役石原河岸の場、綿の出掛つた着  
附半天にて、困窮者の振、往來の人に合力を頼んだり、色  
仕掛、金を取たりして居、云處、拵へ万端申分なく、最初  
が篤實な親父(翫太郎)後(喜知六)代る、よ、亭主、長  
病氣、難澁致し、升と合力を頼む處、あわれ、語る、工合  
、此人の事なれば、甘い事、有升た、親父、惘然な事、と拾  
錢札を一枚、呉て病人の好きな物を買、遣の藥の代、しるの  
と言、渡し、上手へは、入跡を見送り、十錢、斗り、大層な事  
を云、て行キ、ア、かつた、と悪婆の生根を聞せる處、お持  
前、○次(猿十郎)の町、人、癪、お惱、振をして、胸を押  
て、吳と色仕掛、して居處、へ長五郎(左團次)出て、間男也、と  
おすり、掛懐中物を取處、も申分なし、此跡、へ上手より(家橋)  
の新三郎、出來るを見て、又癪の振、て藥を貰、又胸を押、て吳  
といふ、を新三郎、のそれ、の出來ぬ、といつて居處、へ長五郎、出  
て突掛り、一寸、たんまり、摸様、なる處、よかつた、○二幕

日本願寺前、甘酒屋の場、よし、張の蔭、を寐、て居、て久平次(仲藏)眼、九郎(松助)二人の聲、を追、出す、相談を聞、爰へ出、て  
此惡計を引、請る處、も申分無の出來、口併し、梅幸お、とまり、役  
な、ら、余り、ハス、ハ、お仕、す、ぎ、て、躰の振、事が、男、らしい、様、だ、と  
云、投書が、有、升、た、が、是、ら、も、少、し、其、難、無、に、し、も、あ、ら、ず、と、云、處  
も、有、で、す、爰、ら、の、榮、曜、の、餅、の、皮、と、云、物、が、○道、具、替、り、京、屋、の  
場、の、損、料、借、で、着、て、來、た、と、云、趣、向、よ、て、身、形、を、改、め、た、處、の、能  
年、増、高、橋、お、傳、の、様、だ、と、見、た、投、書、家、も、有、升、た、が、本、人、も、と、こ  
へ、氣、が、さ、し、て、仕、惡、い、と、云、事、を、聞、込、升、た、か、ら、尤、も、な、惡、口、な  
れ、と、大、き、よ、行、方、が、違、て、甘、い、事、を、こ、ら、の、察、し、て、覺、て、置、す、の  
本、人、も、埋、り、升、ま、い、か、と、思、れ、升、○達、方、と、云、異、名、か、ら、禪、家、の  
覺、り、の、文、向、を、は、め、た、ゆ、す、り、の、せ、り、ふ、の、實、に、甘、い、事、余、人、の  
決、て、真、似、て、も、見、ら、れ、ぬ、上、手、さ、感、心、な、事、で、有、升、た、○久、平、次  
が、渡、す、手、切、金、の、正、札、で、の、無、と、覺、る、氣、の、付、方、斯、云、處、の、此、人  
の、大、得、意、又、門、口、へ、出、掛、に、性、根、を、聞、せ、る、工、合、も、甘、し、○二、度  
目、の、京、屋、の、場、の、昨、日、請、取、た、は、け、き、郵、便、の、封、ト、包、を、正、金、に  
引、換、て、貫、に、來、る、處、も、前、幕、の、ゆ、す、り、と、同、じ、目、先、の、様、な、る、が  
重、復、よ、な、ら、ぬ、様、よ、作、者、の、用、心、と、幸、島、の、器、用、と、で、惡、婆、の、性  
根、の、内、よ、可、笑、味、ま、せ、て、の、仕、打、大、請、く、○長、五、郎、と、二、人、並  
ん、で、花、道、の、引、込、捨、せ、り、ふ、迄、氣、と、入、て、仕、ら、れ、感、伏、し、升、た、○

高島屋音羽屋よて世話物の當り狂言二三年續て見物を得心させ升たケ來早春も堂か目新らしい新築物を待てかり升イヨ寺島幸師の大將株

中村 仲藏

○京屋の大隠居久平次役本願寺御堂前甘酒屋の場花道場の出甥の眼九郎よ出逢新三郎を退出し唐木屋の二男を二千圓の持金よて智に取事を眼九郎の周旋よて進めるを明床机に掛て相談の處此役の(仲藏丈)に打て付の親父役にて拵へも開化嫌ひのチヨン番よて着附の好み頑固然として申分なし(松助)と咄の内よ都て開化嫌ひ西洋物をどしりて居間た何共云ぬ甘み余人の及ぬ面白さ感伏な事でもり升た□不平をならずと云を笛を鳴すと聞たり杯する梅堂も云ぬ甘さ○愛へ達大のお才が出て新三郎を退出す工みを請負と云を聞て悦び早速悪計を頼み御堂の參詣も止て眼九郎を引連歸宅する處大出來〜○道具替り京屋の場内へ歸りて婆々おかまにも咄す處よし夫々見世先よて何か騒がしき様子は何事と出て來る處お才々新三郎よ女房約束をしたとの掛合是が新三郎を談事で、内を退出す處迄何も別よ貴折て仕らるゝでも無ク只實際と見る心地よて大請□長五郎夫婦に手切金也とて郵便切手を

包み渡して歸し跡よて此事を云斯云處の西洋も悪く云ね〜と云處可笑ムり升た□大請なのハシヤツボを始終チヤツボと云て居るゝの感心なり○再度の京屋の場娘の欠落より唐木屋の要助(喜知六)お縁談を斷ひられ力を落して居處へ長五郎お才が入來り昨日の端書郵便の包を歸して禮を貰に來たと云に骨折とて拾圓を渡すを不承知にて段々掛合の末百圓の内當金五十圓よて跡の月賦となり綱々五十圓の金と渡す處出したたり引こましたりして渡し兼る工合實に可笑い事でも有升た□此金の高を自分の始終十兩廿兩と云て圓の字を云ぬの感心○花房幸治ケ來り智離縁の事不行届きの談判の處ハイ〜と請て居る間の舊弊親父よのよく有奴よて誠にふしぎト、段々掛合詰られ一件元々に復して勘辨して呉と詫るにチヨン番を取たら勘辨すると云れ迷惑がつて頭を押へる拍子に付番が落る可笑味も請升た○實よ武親父役の前後に誰も仕人の有升まい狂言どい思へす只々ふしぎ〜と譽るより外ハムり升た大當り〜二番目の久平次で持て升たイヨ舞臺功〜

中村 福助

○淺川主水弟主計の若衆役奇麗でムり升たさして評とる處も有升んケ兄思ひの實意能仕られて請よし

○所作事は牛若丸役誠まされいよて大出来とんだ能御曹子で有升た立廻りも可成

○漁師の娘おあか是又されい事し踊りのお家の物親御よ並んで五勉強大出来

○中村仲太郎長房の子分大黒の吉持前の愛敬せり平日本魂を云ての衆よからかかれる可笑味出来よし

○坂東喜知六奥女中岩浪中老五十嵐を毒殺の役不評の方唐木屋の番頭要助の軽くて吉

○中村新太郎念佛六助出来吉二番目大切は探索掛ちて長五郎は細掛る役を酒狂よて役を誤り夫限りトロンよ成し由能無事れし事なり

○中村駒三郎事哥女之丞名前相續目出度し名頭下よ昇近仕られ今回奥山の茶屋娘おやまの役めつ相評判よく

お手柄く近頃メツキり役者を仕上られ升た此上共當坐出勤よて勉強が肝要

○岩井孝け松家中女房さしたる事なし○中老五十嵐役お秀の方に浦橋と密通の件を諫めて岩浪お毒殺に逢處能いこなされ升たが直打なく残念

清十郎改  
澤村源之助

○澤村清十郎丈源之助と改名よて名題へ昇進先り目出た

○女形柳底の時節何分勉強が大事し一番目三幕目筑紫御殿諫言の場よ中老浪路役よて出(團十郎)大膳の役

にて狂言によるへ今回情動よよつて中老の部へ加へ升たとの引付の口上あつて見物へお禮のせりふり大きき引立

升てお仕合な事此役り佳業もなけれと至極拵へ万端さまか能上評でふり升た

○中業所作事に松風役只奇麗事のみさ評する處なし

○二番目に京屋の娘おうら役奥山茶店の場花道が下女お

かん(老う調)でつち三太(團八)を違ての出着附の島の小袖よ金入本國織の帯此拵へ今一息工風が有度處なり嶋田

曲の撥も赤い物ツケ一向なくチトさつぱり過中見世の花

豊おて誂への人形が出来たと言事よて是を抱て出られしが人形を臨む娘よおあたまの好などが不釣合かと見られ

升た未だ何と云つても貫目の付ぬ故茶屋女じみると云評も有升た口琴通舎大人の評よ人形を抱て外へ出る娘どの

見へすと云て有升たが此評よ曰く有です此人形も始の内裸人形で有しが様が悪いと云心が後より着物を着せて抱て出られし故琴通舎大人の評の人故中見世で賣て來たと云せりふり聞へと夫故見た目丈の評故内から抱て出た

と見た物なり先の通り裸人形をれば今中見世透りて買て  
 来た物とせりふを聞き其考の付升爰ら余りくだし敷  
 様なれと世の人情と云物の争ひを物と感する余り爰よ  
 記し置升又同人の評も絹縮みの羽織の遊妓の近處歩行の  
 様で悪しと云て有升たが我等が見た時も千秋樂前よ見た  
 時も此羽織の有ましなんだか大人の見違でも有升舞定め  
 て本人も此拵よ余程心配した物と見へ升○仕打よ於て  
 の申分なし富士見二階の場も富本浄るりよて(家橋)の新  
 三郎との色合の振事の處も宣こあされ升た○此浄るりお  
 て娘お梅(菊之助)が端唄の踊の褒美よ買て来た人形を呉  
 る事なるが着物を着た人形でハチト氣張過る様也やハチ  
 裸人形で至當かと思われ升○京屋の場拵へ申分無責八條  
 の前掛が當世にて吉新三郎お勘と見世先にて咄して居處  
 へ達たのお戈の人來るお買物のお客と思ひ奥へ這入んと  
 して振歸り様子を見て居り情合有て大きによまお戈が夫  
 よ難題云掛るを心配えてゐる處も申分なま○濱町河岸の  
 場新三郎よ行逢よ迎て呉るとせけむ處を船よ乗込まで  
 さまたる事なし幸治の内よ隠れて居處もさしたる事なし  
 先名題早の娘役評よくお仕合此上共一處懸命勉強が用  
 要

○笠原軍人役序幕天神の場にて貞行よ万石積の大船築造

の義の公儀へ對し懼り有と諫言をする役なるが此跡よ出  
 る幕もなし何高つまらん役よて評する處なし

○松下珍阿彌役博多の廓よて浦橋の手先を働き淺川主水  
 へ三百金を貸付其後主水内にて此金を主水より請取浦  
 橋へ歸すと云役昨年の後日梅の時に勤られし山口宗庵と  
 拵へも同じ様拵て只役の醫師と茶道坊主と違ふ迄おて一  
 向つまらん役で有升た

○高橋幸右衛門役浦橋の邸へお陰で加増をしたと燈籠の  
 箱を以てゴマをすりよ來る迄の役拵へ万端共十二年の十  
 一月狂言の時の吉良助太郎と同じ行方の役よて此役も筋  
 よ掛らんつまらん役よて評なし廻り合せの悪い事よて一  
 日市村座と當座と欠廻つて端役を拾つて勤て居るよどの  
 氣の毒千萬の事なり

坂東芝調

○花菱屋の遊女小女郎役拵へ万端申分なし此人の愛敬の  
 薄心性もへげんせい役などの堂も淋しく見へて上評とい  
 譽兼升れし事なり○後身請をされ主水女房おてんと成  
 てからの此人の躰にさまり申分なし有喜世記者の評よ娼



妓わびくどの思のれぬと云て有升たケ尤もの評あり○仕打万端申分なし

○二番目に京屋の下女かかん此役のとまり役よて申分なし拵へも相當よて吉○富士見の二階よて布團を出しても乗ぬ處の大ききよよと譽て有升た○其手際よ引替てお梅の相手よ成て端唄の踊りの甚た悪し手堅ハ京屋の下女との見へ兼升た○京屋の内の場濱町河岸幸治内の場とも始終おうらよ付添て眞實な仕振大出来く

市川 海老藏

○菊地貞行役安養寺の場拵へ万端申分なし人品も備り能こなされ升た小性要人を見初紅養上人よ所望せじ處出家をさせる者成故叶ハ難しと出家功德の問答の處さらくどこなされ升た○築紫御殿大膳諫言の場も拵へ申分なく随分宣仕て居られ升た今回評よくお手柄く

○二番目よ品川の馬爪忠役さしたる役よても無久平治と幸治ケ掛合の中へ保証人お入迄の事にて評する程の事なし拵へ其外ども相應にてよし

○松浦伊織と云役ハ大詰預りよ成之故評をし

中 村 芝 翫

○中慕浄るり所作事よ斗り出勤おて第一段ハ熊坂長龍役

大立派く三階惣出よて見事な事て有升た

第二段ハ漁師武藏役(左團次)(福助)相手よ可笑身の踊り手に入たものお家く

第三段ハ竹本長唄常磐津掛合よて奴蘭平の狂乱所作事の功者な物ト、大勢の奴の取巻よて所作立お骨折く

□此所作事三段返しよて大層な錢目なれ共此人の所作も毎度の事故誰も驚かず是丈を抜て大詰を見せて脚色を全くし猶打出しを早くして其上直が安かつたらと云江湖一体の評以後ハ舊弊一洗して見物ケ満足する様お頼と升と投云の内よ認め有升たヲット此小言(芝翫)丈へ云のでり無つたツケが氣の毒様

市川 國 十 郎

○獵人彌平治役序幕安養寺の場紅養の招きよて出来り娘お秀(小性要人)を預る處拵ハ鎌鼈の生たる好み着付も相當よて申分なし同じくたんまりの場娘の手を引風呂敷包を脊負茶紋羽の頭巾と無造作に冠りたる處吉仕打のさして評する處なし○大野村内の場大島のとてらの拵へもよし要人を娘に直し預り居處へ門番空藏が來りお匠匠様の鉛貨の拷問よて落命なされたと咄を聞て居る間さしたる仕打ハ無れど獵人相應の思人申分なし袴津橋ケ人來り娘

お秀を妾に差上るとの談事の處さふと吉と、だんま  
 かりのくだけみ成浦橋の紙入を奪たる語りの間も例ものさ  
 らくどした持前まで遣て居る、いさで舞臺功何となく  
 甘い處が有て感伏し升た○浦橋邸の場一升徳利を下て花  
 道々の出爰の娘の蔭よて只村彌平次と名乗て五百石の扶  
 持を取て放蕩づくめで居と云役也拵への綿服も鹿末な袴  
 大小を下手よ帶た工合大きよ吉顔の作りへの前幕も付罷を  
 して居位な鎌罷を刺た好故青罷位の有てもよさ相に思  
 れ升○酒よ酔たる搦梅よて玄關口方重太夫が内よ居か見  
 て遣と透間を覗く振事も否よ尻ッピリ腰杯を仕なくツて  
 請升た夫より内へ這入浦橋お否のらせる事斗り云て居處  
 の連大舞臺故甘の事くト、五十兩の無心を云掛借て出  
 る處万事扱目なく相手の(左圍次)が沈着て大出来故(三  
 升)の仕打直く引立て見へ升た□始終重三く云  
 て居處よし○花道へ引込の時此金を持て何處へ行ふかと  
 色々云てイヤと止よしやう溜ると仕様と云處の宜つた  
 一併し躰よ品の有人故堂しても己前獵人得有た人と  
 見へ兼升た今一息いやしく作られたら宜ろうよ○佐屋  
 形山の場浦橋よ引張れ來り身の放蕩の意見より預つて  
 居連判狀を歸して呉と云る、を否よからんで我儘を云處

の面白事有升たト、浦橋おたまし討ませんと切て掛  
 が返つて自分が殺される立廻りも悪く長くなくて能く  
 升た□此殺しの場へ義太夫を遣入れ升たが何高一向チヨ  
 ボよとまらば爰の無むがなと思入れ升た  
 ○鳥山大膳役築紫御殿諫言の場花道々の出拵へ万端申分  
 なし遊の好き由良之助よ見へぬ様と鬢の張た處へ請升た  
 □水牛の兜のむ入た箱を持せて出られ升たが此箱の新ら  
 しいの如何○殿の諫言の處が浦橋淺川兩人と問答の處  
 例の辨否者此人の得意の役否哉へムり升ん上評の知て居  
 升ト、水牛の兜を飾り貞行と得心させる處申分なし○  
 御酒頂戴と成てより中老浪路(源之助)酌よ出るを狂言よ  
 よそへ名題昇進の事を披露の口上の請升たく○道具替  
 り城外 闘討の場へ該狂言中眼目の處よて見物の待て  
 居處迫り(三升)の腕前一統感伏致し升た道具も好み有て  
 正面の書割の置て外廻し斗り廻して松の立木と繰出し此  
 間だくを主水ヶ切て廻るを程よくあひしらむト、松の  
 木の蔭へ身を藏し此幹を手ふてさぐり場合を見て「ゲ  
 イ」とおくびを壹ッ仕て跡へ跡を引主水の此聲を目當お  
 切て掛るを身をかかし腕を取て引敷處の息合何とも角と  
 も云ぬ程甘の事有升た口是が得意の能辨を以て「今藩

中めてケ程神流の太刀筋を遣ふ者の淺川主水の外も無  
 しと聞よ主水へ異見の處りふしきく○幕切に(升藏)の  
 中間ケ燈灯の火を付て出来り落て有小柄を拾ひ差出すを  
 取て見「コリヤ拜領の盛分船」と云を(升藏)が「エ、」ト云  
 提灯をたくり明り消る「又消おつたか」との幕切の實も外  
 よ仕人なし感伏の外なし○先年當坐よおるて此黒田の狂  
 言の出し時島山大膳(故人坂東彦三郎)毛谷主水(今の菊  
 五郎)よて殿中廊下よて大膳を主水ケ間殺なさんとする  
 處有しこの此誓古のとき菊五郎の兄貴(薪水の事也)誓古を  
 して吳と云し時彦三郎曰く何誓古ケ入物か元より闇討の  
 事だから無法よ切て来るが能予ハ夫を程よく退れてさえ  
 居バ能の也と云しとて樂屋の者此初日を待て見物し成程  
 上手な物感伏な物と稱賛せしと其頃の咄也しが今回(團  
 十郎)の此役よて主水の白刃をわしろう振事を見て薪水  
 三升両人の伎藝何れを何れと評し難しと樂屋の高評也と  
 風の便りよ聞じ儘を記す物也○大詰吟味の場預りよなり  
 大膳も此場限との残念で有升た○星野東右衛門此役の淺  
 川の朋友にて大膳より主水所持の小柄を本人へ歸す様と  
 諾されしが主水が悪人荷擔の事を知り切腹させて云譯立  
 させんと女房おてんを我家へ呼奇た跡へ來り朋友の信義

を盡し三百金を出し浦橋へ返却させ切腹を進めると云役  
 此人の事なれば初中さら〜と仕て居る、ケキリ目〜  
 ケ答へて感伏し升た先の出の黒羽織着流しよて駒下駄を  
 はき再度の出の切腹檢分の心持故服を改め袴を付け雪駄  
 をといて出られし能處へ氣の付た物口主水ケ緩〜支  
 度して切腹するを側よ居て何も云ず黙して居て腹へ突立  
 刀を引廻さんとする時「よ、美事」ト一言いつて幕を切れ  
 し不思議く余人の能せぬ事です  
 ○中幕淨るりよ常盤津岸澤久と不和にて有しを今回和解  
 に成出勤の事を座附口上にて披露されし五苦勞さま口  
 上の又お家の林外小類なし  
 ○大切な歌舞伎十八番の内矢の根興行是に分て評する迄  
 もなくお家の株よて只古風を見せらる、狂言殊よ久々  
 よて演さよ升たによつて七代目團十郎が興行の年月并よ  
 役割を記載してお目よ掛升

○文化十四丁丑年三月狂言○櫻娘東文章河原崎坐  
 二番目五節句所作事の内五月○整分身五郎矢の根五郎  
 團十郎馬士坂東善次後彦左衛門此時ハ十郎なし  
 大薩方文太夫○杵屋作十郎○杵屋三郎助  
 ○天保四癸巳三月狂言○隅田川花御所染 市村坐女清玄

七代目四郎改海老藏倅海老藏改八代目四郎

二番目助六所縁江戸櫻四月廿三日半四郎(大太夫)糸三

郎兩人病氣あて○盛衰記○矢口渡○三代記も替り壽十

八番の内矢の根五郎海老藏○馬士彦左衛門○十郎羽左

衛門(今の家橘の親父)前狂言の間よて勤る

大薩戸文太夫○梓屋淺吉

右兩度興行の後一度も演ざれし事無かりし今同久々おて

九代目三升勤られ我輩記者共も始めて見物いたし唯々感心

の外なく勇しし事でも有升た此後其又々十八番物の内を撰

出し後學の爲演ざるゝ事を待て居升く

... (faded text) ...

○市村座 藝評

太閤治世 張扇子朝鮮軍記 五冊

昔講談 着三升伊達襦袢 三幕

中幕 浄朝鮮治の兄弟連 鉦音祭商人 清元連中

理麴包賣の親子連 片岡我童 三樹源之助 大谷門藏 嵐和三郎

尾上菊五郎 尾上菊之助 尾上松助 坂東三津三

坂東家橘 一番目二番目の中幕も相勤申候

去る方様の御差圖請 古きをもつて新しく 關取千兩幟 二幕

○嵐璃寛殿下久吉役音頭の瀬戸船の場拵へも通常尤も

の好なげら何か物足す太閤とい見へ兼チト不評の方なり

船中も殺氣立しとて與次兵衛を曲者也と見抜處さしたる

事なし俄も暴風吹起り船のゆるる思入の處左の手を開ひ

て浮雲ける振がいかにも臆病よ見へて久吉らしく見へず

大不評で有升た□龍神も祈懸し太刀を海へ投人る處も威

勢薄く堂もあきてい龍神も感じなからうと思ふ様でした

○同旅館の場與次兵衛尋問の場も例の生ぬるい臺詞廻し

故一向答へケなく爰も不承知なり先久吉ハ此人よとまら

す

○大谷刑部良高役平關酒宴の場より門外乱軍の場とも  
さしたる事なし問道の場瀧は苦しむ處より大同江の場ま  
で百事梅幸子の添役にて評する程の處なし大詰和睦の場  
同断さしたる事なし

○八汐の大評判東京上り以來の出来場稜敷共かしなへて  
請よく拵へも申分なし和らか身の内に強み有てよし○ち  
と強過ると云投云も有しがさやうでも無かど見られ升た

□全体此八汐と云役の誰が仕ても請の能役（先年中山文  
五郎が仕た事が有升たが是の余程悪かつた）よてもうか  
る物成が今回のハ最負眼なし大出来で有升た□千松の

殺しの今一息憎ッ振ま仕るしかつた○例も千松が蹴とば  
した菓子折の其儘なるが自分で拾ひ集めて折を持て這入  
るハ能處へ氣の付れ升た是ハ斯有相な物感心ハ○最  
初の障よてハ絹川を仕なさるとの事也しハ（家福）も代て

出られずれしハ事也角力ハ見度ムり升た残念ハ  
○千兩織ハ女房おとの役毎度手覺の有事と見へて評よ  
し出這入ハ否な振事を仕なさる事ハ持前なれば見免しと

して江戸長崎のさわりの處などハ甘ハ物で有升た定て坂  
府へて宜形を見て置れた物と見へて感心し升た八汐と此

二役ハ一番目の手際とハ大層役者ハ違う様で有升是を見  
れば此人も適ハ年功手答への有人と見へ升

○片岡我童）李如松の役ハ和睦の場よて條約取結迄の  
役にてさして評する處をし

○朝鮮飾の松ハ役花方手揃よての取作事故花やかよて能  
ムり升た取作事ハさしたる事なし

○松ヶ枝的之助役ハ相應よこなされ升た拵へのアツシ形  
ハ組合せた損様の上下なりしが悪ハ思ひ付なり相手の親  
玉なる故以何と思ひし少しもめげず遺てのけしハ能ハ  
喉玉惡落も無ハお仕合ハ

○細川勝元役拵ハ万端申分なし中々大役殊ハ山名ハ（  
菊五郎）なり仁木ハ（團十郎）あり定て見劣りハして見惡  
イ事有うと思ひしに感心ハ大出来よて臺詞廻しも能押

手もさみて能ムり升たお手柄な事□証據の書付を山名が  
取んとするを一寸見せびらかすハ如何な物と思ひしハ後  
よハ仕なく成しハ大きハ吉○外記ハ藥湯をあたへる處の  
出ハヤハり長上下なりしが爰ハ半上下ハ成た方が吉□決

斷處ハ長上下と云ハ勝元上使歸りの故なれば也されば寸  
暇われハ半上下に着替る方ハ至當なれば以來心得ありた  
し七代目三升以來藥ハ坊主に持せて出る事ハ成しが我

童子自身も持て出られ升た尤も勝元公手づからと云せり  
ふも有升が坊主が持て来ても手づからと云て子細な  
ら成丈威を付る方が見た目が宜物なり注意ありたし○  
併し自分持て出るの昔々の紋切形なれば愚い云譯で  
なし

○千兩鹹は岩川治郎吉役拵へのチ好悪し殊も博多の  
帯の立役めかずして見思し仕打の思ひの外能こなされ升  
たが「角力冥利」の口解の處を立ただかつて土俵入の振事  
杯仕なすつて強々敷甚だ見苦しうムり升た○併し此位に  
仕すの場ヶ持升舞ヶ派手に成升ヶ譽られもせぬ仕ぶり  
山□何分鉄ヶ楸ヶ(團十郎)故如何かと思ひしに相應に見  
劣りなく仕て退た處の大手拵——○髪すきの處のさして  
評する處なし何の然れ臆面をしま突込で藝を仕なさる故  
舞臺振やかまて吉隨分勉強を頼升——當興行大役斗り引  
請での出勤廻り合せとの申あがらお仕合——

○河原崎國太郎)女房お島役與次兵衛内の場世話女房の  
手ふ入れられた物故申分をし庄屋太郎兵衛(門藏)の案内よ  
て水神の社へ行夫與次兵衛は暗夜なげら暇乞の處愁も可  
成よて申分をし○殿下旅館の場もさらくとこなされ升  
た

○伊達と沖の井役拵へ万端申分なし此役の誰ヶ仕ても儲  
役よて評の能物なるが譯て(扇之丈)出来よく品柄の能性  
故一ば引立て見へ升たを□竹の間引込の時八汐に辭義  
して立上り神文を一寸八汐に見せる八汐ヶ手を出し取ん  
どするを見せびらかして引込よ成升たヶチト場當り過升  
ぶおんな事を仕なさると何となく下等劇場よ見へて悪し  
以來廢止よして存し○榮御前上使より道具替り迄のさ  
したる仕草も無れば評なし

○坂東三津三)梅園役の殿下御生船の場暴風を鎮ん爲よ  
龍神よ對よ成んとする處さらくと吉對した役も無れば  
評なし

○朝鮮飾のふかね役奇能——(家橋)(我童)合方よて所作  
事容色よければ色氣有てよし

○松島役の沖の井よ續ひてのもうけ役相應よこなされ升  
た調子がわるくチナル性なるが是かとれたら申分無です

○三軒源之助大昌錦の太語條約立合の役評する處なし  
○漢朝來の淨るりよ出る朝鮮人始終異人斗り仕てゐる  
ゝとの穩當の人と見へたり幕切よ飴屋の屋臺の上へ上り

出印の人形よなるどの氣の毒な標よ氣の利ぬ役なり  
○山中鹿之助の對決よ外記着添の役さしたる事なし

○坂東竹松(千松)の役大出来チト小さ過るかと思てゐる升  
 たよ中々能こなされ升た實も後世恐るべしの坊ちやん也  
 ○尾上松助(水主)鳴戸の鯨藏役御座船の場拵へ花色法皮  
 よて脊へ大紋の付しの能好で有升た船中も殺氣立しよお  
 やしと奴と見止らるゝ處の云譯始終無骨なく甘い物で有  
 升た與次兵衛内の場妻の島も惚て口解も來る處も例もな  
 ぶら手輕い仕打の請升た親子の者がそわくゝとるゝ不審  
 と考付熊とどづし歸り水神の社へ捕手を引連れ來り與次兵  
 衛を捕へんどの間仕合可笑身交て大請く〇旅館の場與  
 次兵衛夫婦を吟味れ處も手強く仕られて吉後綱も掛り迄  
 申分なし

○葦原三郎役行長の差圖よて朝鮮農夫の出立も成て敵  
 地の様子をさぐりよ出歸りたる處此拵へ中々コツてさも  
 左右かと思ひるゝ好みて請升た仕打のさして斯と譽る處  
 もなし〇同じく間道の場へ手負よて行長の跡追來る處の  
 拵へも例の見覺の鹿兒島以來毎度の事故請ましなんた  
 ○大明の長官松餘林役大詰條約の場よて一寸和睦を拒む  
 役さしたる仕草も無れば評なし

○浄なりよ唐使井底眼役一寸したおかし身評よし

○尾上菊五郎(張扇)朝鮮軍記に船頭與次兵衛實の黒崎

陰義役御座船の場兄團右衛門の敵なりとて太閤を付ねら  
 ひ船頭よ入込しよ船中も殺氣立しと殿下の詞も吟味よな  
 り水主齋藏のあやしき奴と詮義をする時懐ろろ短刀を落  
 したるを見留られ久吉よ曲者也と見顯されト、水中へ飛  
 込迄申分なし拵へも相應の好よて吉〇水神の社の場庄屋  
 太郎兵衛が手引よて女房娘よ逢暗夜よて暇乞の愁歎見物  
 一同涙をこぼし升た例の音羽屋流の行届さよて面白い事  
 で有升た後齋藏の注進よて捕手來りだんまりの捕物も成  
 處甘い物く〇旅館の場繩付よて出來り太閤の御前よて  
 兄團右衛門の敵を討ん心なりと久吉との問答の處〇三  
 升が演されし荏柄の平太を世話で行と云趣向故眼先が變  
 らぬ風情も有しけとこの器用者の此人故中々面白く覺升  
 たの感心ト、玄海遊よて仕置も成と云幕切迄申分無  
 ○小西攝津守行長役平讓園酒宴の場此狂言の先殿の朝鮮  
 時件をはめて豊臣時代の名を借たる迄よて此行長の花房  
 公使の拵且なれば始終の氣持能今を摸して大出来でムリ  
 升た一揆の起りたるか此間と討て出たる處前後を構わせ  
 戦ふ處兵よせまりて宜ムり升た〇紺縞子の鎧下よて白茶  
 金襴の縁を取たる摺梅とんと洋服も見せたる思ひ付の感  
 心よ能好で有升た〇同じく間道の場大谷刑部の癪を病み

石田光成の谷へ水を汲み下り袋へ葦原三郎手負まで來り  
双方を助け難義する處堂も西南時件の様が目付て成升  
んです○立塲茶屋まで赤面夫(門藏)も逢餅をたべ腹をこ  
じらへ大谷石田と三人大同江へ落る處よし○大同江の場  
の道具の好もよく何高朝鮮くさく思ひれ升た渡海せんよ  
も船一艇もなく世を得ず此處まで生害せんと三人とも刀  
を腹へ突立んとする處へ赤面夫船をこぎ來り是へのせ落  
す處迄何と云ても目新らしくチト長たらしくの有升たが  
初中終許よく見物一同請升た事で云つた○大詰和睦の場  
のさして評する程の面白味なし只條約取結迄の事まで終  
り拵へ其外共一通りよて吉

○淨るりも麵包賣音松忠臣藏十二段の振事出来よし

○伊達よ萬の嘉藤次役斯様な端役と勤めらるゝの定めて  
趣向の有べき事と思ひしよ案の條拵への木綿の紋付に白  
小倉の袴極の蟹のさげた大曲髪までトシと劔劇家の浪士  
と云好みなる程梅幸子の仕相な拵へ併しながら天井へ  
忍び込込人が袴の堂云物が無そこらへ引掛るだらうと思ふ  
様です是を今一息工風有たら申分無です事勿昧無程  
扱る程能ムり升た實に八汐に別れて引込の處など又格  
別く織り十日斗が出来るゝと新富座警古との事よて

壽美藏)も成升た残念く

○山名宗全役此拵への近頃一洗した大老酒井侯の氣持の  
好よて一通りの事仕打の寺島の事故申分なし何よし  
對決が立派も成て宜ムり升たが此役もか約束だとか申事  
よて(鶴藏)も代り升た斯なると願ぐりよ(相藏)が鬼貫の  
跡へ廻り黒澤官藏の(巴二右衛門)と下り一人の事よてグ  
ット安ッボク成て仁本(團十郎)斗り立派もて實も遺憾な  
事で有升た此位なら一層の事始から出ぬ方が能つた位奇  
物也○先久々よて市村座へ出勤大入の見物も成しも寺島  
子の骨折愛敬と云物が目出度し

○中村鶴藏)道益妻小枚役切下げ髪も被布の拵へ有し  
げ道益死去後髪を切たと云氣持より被布を着られしかあ  
れとヤハリ例もの浦船姿の方が能様で有升た是の先見物  
一統不請の方なり仕打の申分なし□此人の悪弊にて何か  
樂屋落を云て役者輩をおかしけらせるお太鼓根生が有て  
成升んと云の小枚役にて八汐の見出しの場へ出て來る時  
のせりふの内に何かトツチた様な分らぬ事を云るゝの我  
ホ見た度に毎度の事也又余人も此事を申され升たから定  
て常不斷云た物と見へ升されば是を問役者がツツ〜笑  
て舞臺へ降り其惡し何は見出しのた〜した中なりと



云て不才簡千万な下等役者の我利く親父だ以來注意して貰升ふぞ

○大江の鬼貨役のさしたる事なし伯父君と云威勢なく不評(菊五郎)の跡役山名宗全を引請られ升たが大がいお出来

○北野屋七兵衛役さしたる事なし今度の廻り合せ悪く新富座の一番目も業役市村座の二番目も端役始終お斗り拾つて居らるゝの實にお氣の毒で有升た來春の大役を引請り、ル舞臺を改めて腕前を見せらるゝを待て升

○嵐和三郎)朝鮮館の小櫓役此子よのまる様よ作者の注意始終出過ての叱らるゝおかしみ宜に來升た

○尾上登美松)今回者(岩井松之助)休座にて赤面夫娘翠丈の代り役能出來され升たお手柄く、○奥女中のさしたる事なし船頭の女房の好おしく氣がき、過て船頭の女房らしく見へず不評なり出情次第で名題へ上られ升ぞ役々を粗未よ仕升まい殊も極幸丈に隨身しられた吉お仕合々

○大谷門藏)山口玄蕃弘正役手強く仕られて評よし○庄屋太郎兵衛の篤實にて能初中功者よ宜こなされ升た○大明の餅商人赤面夫の親父役のめつ相評が宜ふり升た拵へ万端申分なく此人で余程持て居升たの感心く

○市川壽美藏)伊達に榮御前役大きに不評で有升た何となく下品よて眼目の千松殺しの場の氣配りも答へず升た此春の(仲藏)のが目に残て居るせへか今一息見榮が仕ませんでした

○渡邊外記左衛門役も何分品格薄く大國の家老との見へ升升た殊も余りせせく仕過て浮雲なく見へ升た仁木程の大悪人を相手取對決を仕様と云大丈夫な老人故今一息答た處が無ての成升まい□道具替り例の仁木刃傷の場へ相手ケ(三升)故立かりの極さらくなりしけ仁木を仕止勝元ケ出てからの大危んく御墨附を請取處杯のわる長

く仕過て實に外記に中られて胸が悪く成たと云見物も有た位○狂言を仕て見せるも能ケ(團十郎)ケ引込だ跡なり何ほ何でも見物ケ嬉しげつて見て居物か愛らひ目先を利してさらくとして幕を切方ケ利口なり注意し給へ

○菊五郎)新富町へ廻る様に成てから嘉藤藤次の代りを仕られ升たが此人のヤハリ従前の黒の四天よて時代よて致されし五尤も千万五苦勞く

○尾上菊之助)與次兵衛娘お岸相應よ吉○淨るりよ麵包賣の娘お菊役宜出來升た今が一番六ッヶ敷年頃何分勉強を仕なされく

○市川四十郎 伊達袴袴に足利頼兼役花水橋の塙辻鶴よりの出拵へをグット換て紋切形の竹下雀の惣纏の羽織小袖まで有しが今回の黒羽二重の紋附白重ねなりし人品と云先此人が仕られたら斯な物かなれと吉原通ひよ下着白揃ひの如何な物かトント御登城下りか屋敷へ行す直に飛で来たと云風情にて尤もな拵へとの中されぬ好みなり恐ひの待ひを扇よてあひしらふ處の威有て能ふり升た爰もチト心得ぬ事(家柄)の嶋田重三郎とか云役の人の欠付来り介抱しられ升が此嶋田と云名前の人の高尾の間夫よ成て居る筋の脚色が多う有る今回の新作と云譯でもなく爰へ出られ升の何高おかし様で有升た○全株本文の絹川谷藏が出る場なりしが子細有て(瑪寛)が出無事よ成て此嶋田重三郎よした様子なるが随分苦しい趣向あり大名の廓迫ひ故御抱の角力取を供よ連れると云々狂言の山なり○堂でも能とヤツ、ケにすると田舎芝居見た様で甚だ見悪い事です

○乳人政岡役扱此人が此役と仕様どの實にかもひきやにて看板が上りしより町中の大評判よて極めて宜との云ぬマア通常の人が(四十郎)の堂か仕たせ政岡を演すとの何事近頃の妙な物ケのまつて見物を感服させる處からの増

長だ杯と高評とりなる故初日を待て見物し升たけ扱不思議よ大出来併し譽る者めつ相譽る又悪く云連中も有升たが先大評判大請と申ても最負眼で有升舞○竹の間花道への出拵へ万端申分なくめつ相若く美しくいかよも忠義一圖の氣持見へて吉此場の爰と云て譽立る處を引込の時沖の井が差上た膳部を自分で持て這入のケ紋切形なるがお傍女中よ持せ自分の錠前のかりた塗桶を持て引込よ成升たの吉○飯焚の場道具屏風等の好例の關洲流よて立派な事仕打の一々の申させんが飯焚よ取懸る時若君と千松よ双六盤をあてけひ折羽をさせられ升の宜思ひ付兩人の子役がメレなくて至極能ふり升た口併し例もの通り交りく飯の出来を覗きよ行處の有升ヶ爰に成てハ例の通り膝へ手を置ボカンとして居方ヶ情合ヶ有升かよ思われ升○床の淨るりよ合して米をどく事杯ヶ有處ですが此人の淨るりと委細構わす語らせ自分の茶事で遣て居る余人の仕ない處□米の水通しの時手を濡さず茶筌で廻して置の七代目半四郎(去年故人よ成た仕若の親御)の形なる由是の手元へ取寄て有米の最早十分洗て有と云心持か○此米を釜へ入水加減をする時余る湯を金瓶へ取て置後で飯後の香湯を差上るの念入よて吉○雀の籠を干

松よ云付榎先へ出せる時千松が立しなみヒヨロ／＼成  
 尻餅と突事をさせるの腹が減たど云こなしを例でもさせ  
 る物なるけ道よ今回の有様な賤しい涙の無たの大請此鳥  
 籠を持ってから少し斗りヒヨロ付事が有升たけ目立ぬ位故  
 大さよ吉○鶴千代が雀も成度と云る、時の泣け盆へ乗た  
 米を思はずこぼし此盆を顔へ當て泣處に請升た□榮御前  
 御入ふ成菓子の手詰るハ沙が千松を取て押へなぶり殺し  
 の處此間が政岡中の眼目の場まで泣をこらへる處より榮  
 御前が取替子なりと引手を喰思入の有處故胸を見せる場  
 見物も息をころして見る處爰の先申分無の出来（故人榮  
 三梅幸の不思議は廿かつた様子有升た）夫より榮御前  
 が大事を明し連判状を渡し歸るを見送る迄只合点の行ぬ  
 と云思入が十分見へて大承知の御殿の内を見廻して千松  
 の死骸を取付處も余人の堂かすると襦袢を脱て掛り升げ  
 其儘まで取付愁歎の中より自然と脱る工合ハ五尤もの仕打  
 ○是が大泣もある處も宜出来され升た○此泣様不十分  
 なりと云評け江湖で噂有しが是も尤もの評言なり一休立  
 役の人の泣事ハ不丹纏なる物女形ハ若年より愚痴つばく  
 泣事を替古して育つ物故堂しても上手な物なり先立役か  
 らする人まで此位泣け申分なしと云ねば成升舞か□記

者ハ（團十郎）鼠負故何でもヨイ／＼と云げ一体全骸物味  
 は今回の政岡の愁しく無と思ふけいかよ○誠ハ五尤も千  
 万併し我等が説ハ原此飯焚と云狂言の十分悲しい物で  
 の無と存升其譯ハ此狂言の山ハ五十四郡の大主が空腹思  
 ひをするど云處を見するのなれば先差當り腹の減た處の  
 悲しい丈の事まで到底千松が死でから漸く本間の悲しい  
 處ハ成事まで竹の間が飯焚へ掛て古今の長場役者の貫目  
 見物ハ又鼠負眼まで見て居と云ヌレ場此鼠負眼が無つた  
 日にハ泪處かあくびが出るが五尤もなる狂言殊に近年ハ  
 悪い風ハ飯焚ハ茶事ですると云の紋切形の様も成て本  
 人も何流の立前だとか何とか云て自然と長く成て見物も  
 又感心ハ無言で辛抱して居ねば其の芝居見で無様に思ハ  
 るハも誠希有な咄なり○去ながら見ぬ先ハ惡口ハ云た物  
 の先荒事が身上の役者まで有なから堂見ても加役でいな  
 く眞の女形の様も見らさしハ感心先我等もおゐてハ惡口  
 ハ云れ升ん御膳上等と申ても可ならんと存升口此跡が仁  
 木其跡が鎖ヶ嶽犬から新富町へ歸つて矢の根五郎の荒事  
 どの實ハ恐入た物彼是駄評をやり勿鉢無様だと謹んで贅  
 談します

○仁木彈正直則役床下の塙花道スツポンの出拵へ万端大

幸四郎の血脈の譲り物一點の申分なし最早年功と云貫目と云殊よ今回の大劇場で仕られ何となく能心持でムリ升た○對決の場是又毎度のお勤手よ入た物彼是云處なしお家く□併し側役者が落尤も梅幸山なくなつた後此一人役者故何となく仁木斗り威有て側を見下して居様よ見しし残念○外記たまし討の場も近年流行の大立廻り杯なくつて極さらりと仕られしの大舞臺く方今仁木の外は類と異似人なし

○千兩 幟も鉄が嶽駄々右衛門役拵への内鬘が見惡う有升たが後お直つたどの事着附の申分なし大小を差れしの大名の抱へ角力と云當込か最とも好み仕打の極さらくよてさまたる事なし調子の大きい持前とは申なけら感伏して答へ升た何役でも嫌なく引請る舞臺好の親玉

○板東家橋 甲利大膳大夫照元役是は此人にはまつた役にて申分なし船の場も與次兵衛詮義の場も拵へ万端申分無□詮義の場にて與次兵衛取持の短刀を取上て持て居らるよ扇紗へ包んで置るよは堂云心得り一向解らず○此外は愛と評する處なし

○石田治部少輔光成役初中行長よ差添居役此役も舩よ有役前故申分は無仕草も譯て評する處なし  
○朝鮮館の渦八役淨るりの振事例なげら大出来申分なし併し別て評する程のケ處もなし

○伊達よ島田重三郎役花水橋の場へ山浪人拵への侍ひみて頼兼へ仇する忍の武士を追拂ふと云役前も評した通り何高依舩の知ぬ人物堂云作意なるか解し兼る役なれば評よ掛らず○先今回は(我童)を書出し廻し(四十郎)を立か山の座へ居自分座頭の座へ御居り有しの大した五出世余程身上を仕上られたと見へし古今のお手柄此上共情々勉強と祈り升くよ橋屋の色男く

久松座藝評

○石川染双巴白浪○是評判淨名讀賣○大切積戀雪關扉  
 ○市川右團次○油屋の番頭善六役序幕隅田川夢の場此狂言の(親父小團次)又(尾上菊次郎)の當り狂言にて評判なりしが(家升)船の場の拵への夢あれ人物を能するの通常なきは免し升がチト人品が能過升の様なり今一息工風有たし同じく芝口濱の屋の場夢の覺たる處もさしたる事なししも無理成が米升の時の爰も可笑身有て宜ムり升たが只の右團次よて残念○油屋の場のゆさを善六の場よて外の役者の衆善六お付合見た様を物よて善六一八十分よ狂言をする處仕る事の昔々紋切形の振事にて肝心吝惜身と可笑身の薄く大きよ退屈を覺へ升たの藝に愛敬ヶ無物と云べし○此夏壽座で出た時の(中村銀之助)の方の面白かつたと云投書ヶ有升たヶ○是の余まりお悪口か尤もまだ(銀之助)の心貫目ヶ無故廿五座神樂の様で有りが愛敬で持て居升た連よ此人の舞臺立派の處の論よならず○例の通り子僧の時の着物を着られ表へ突出されて爰へ(丸童)の下女が出氣の毒な事として自分の着物と帶と貸事あつて是を着て頭へ手拭を冠り今一度説言して見んと女の悪身よ我内へ入否身な當振をするの悪長くて閉口夫

より誰もとる白鳥の徳利を頭おして下駄をのき脊を高くして表へ出ると云古の趣向余り知恵の無不感心な當込なり○此徳利の洒落の親父の時よ仕た事と聞ましたが親父が仕たどて悪い事と悪いなり併し先代の形とあれを今さら悪く云の氣の毒なり○お染の人形身の跡へ番頭の人形身桃色木綿の纏伴一枚と云拵へ堂云了簡でムるか先お裸おされ子僧の時の着物を着せられ追出され夫が女の形よ成ての引込然るお此場よ成て纏伴一枚と人馬鹿よした處は堪忍もするヶ全く余人が別よ爰へ出たとしか見へず殊よ眉毛のうごくと云趣向も後小人形身を放れて劇場お成てからの幕切よ此眉毛が八の字よ成と云洒落誠よ場當り計り好まざる實お鼻持のならぬ下等役者根生以來を注意せぬと大建物よはなられ升んぞや○故小團次の時も斯で有たと云噂成しのが久しい事故記者も忘れ升たが何よしろ請られん振事也○娘お染役野崎村の場最早振袖娘の大無理よて此場の洒落の來た方なり此場といつてもお光よ喰るゝ處なるが其内にも今回くはへて振まのさみ升たお氣の毒○さて人形身よ成と不思議よ能ムり升た又客顔も能見へて速ヶの坂府育ちの人故手ふ入られた物感心く併し先年(福太郎)の時分見せられた方が可愛らし

さか十分よて最一息能つたと覺へ升た今年の堂云年柄か  
「先代裁」と云「お染の人形身」と云兩度迄出ると云も希有  
な事なり(慧星の出た故か)バ、ツナイだから掃と云地口  
か悪い洒落だ○彼是の申物の市村座と新富座の間へ狭り  
相應な入を取れしに全く此人形身がキイたと見へ升お手  
柄な事

○關扉お宗貞と云役割の見へしが(小團次)へ譲られ出勤  
無さんねん

○市川小團次(石川染に眞柴久吉役(春木座と云當座と云  
久吉斗り仕なさる人だ壬生村の場拵へ万端分有です長  
上下の赤地の堂云物かヤハリ外色の方々穩當で能かと思  
へれ升五右衛門跡を見送り思入の處の仕打大山で有し  
け一向應へす治左衛門と押へての幕切爰に久吉の眼目の  
處成がチト幕の切兼升た様なり殊も仕方無物あり○義  
輝館の場五右衛門との出合例の友市ヨと世話詞になり  
昔漸も成處も此人持前の舌の返りの悪い性故何分答へず  
實もヤットコサで有升た拵へのお仕着にて吉

○岩木落馬役釜入の場へ出る斗り評する處なし

○二番目久松役見ぬ内から相像の通り初中後共のまり  
悪く評する迄もなし黒縷子の帯をベル丁雅とと堂しても

諸取兼升○人形身の傍附合よ藏の中にての人形身殊も仕  
悪かろうと思ふ様で大五苦勞

○關扉に宗貞役是亦のまり悪くさしたる事無つた

○釜入の幕がべると幕外へ人力車夫よて(芝翫)旦那の迎  
よ出ると云趣向サア斯成と此人の者五分も透ぬ拵へ藝娼  
べた惣と云愛敬感心な事(年中斯な役斗り仕て居譯も  
行舞(何分勉強ケ肝要)

○中村傳五郎(蓮紫來作役)したる事なし

○足柄金藏役五右衛門手下みて壬生村へ出る役五苦勞

○岩木兵部役釜入の場斗りよて評する處なし

○松屋源右衛門役油屋の場善六の相手よ成ての可笑身余  
りおかしくもなし併し相應に出来升た道具替り人形身  
の中分なし

○中村かゝる(來作娘おせん役)可愛らしくて吉

○浄臺綾の臺役品格有てよけれと評する程の事なし

○お染よげいまやお糸役寄麗よてよし

○市川金太郎(五右衛門伴五郎市役)宜出来升た

○中村芝翫(石川染に石川五右衛門役)此狂言の先年中村  
座春(故人小團次)大當りを取し狂言よて「木下陰狹間合  
戦」と釜が淵双級巴の二狂言を合併よした脚色よて實の

無理なる取合せ物なるが堂云處が人氣よまつたか大評判成しけ今回此人が演ざれし處遠の(芝翫丈)の愛敬愛と云て譽る感心な場も無れど見て居らるゝも名代の人氣取のぼんやり人〇壬生村の場持へ万端分なし仕打も大手も仕らるゝ迄おてさして難否もなし手下より(傳五郎)鶴五郎(照藏)のじめ物出よて舞臺賑やかよてよかつた〇足利館の場久吉との出合昔咄しの場爰の(小團次)の時のツヤ付た處なるが一向應へす唯人形を見て居る様な氣持けし升た「つゝら負たけれかしひか」の引込もさしたる事をし〇同じく内の場お瀧のまゝ子責を難義がり五郎市が跡追ふ處も愁い少しくもなく随分さつぱりとした仕打なり〇四ツ辻の捕物も一通り仕て見せられた斗り評する處もなし〇されを此五右衛門の眼目とする釜入もすみやかよ輕う仕て見せると云迄よて見物ものん氣よて實は保養も成と云方々の仕草よて諸人免許の大哥舞伎役者唯だふしきしと筆をさしたく〇釜入の幕降りて幕外へ當世拵への客人よて出新富町から迎ひの來たと云趣向よて一寸見物の氣を取嬉しげらせ升た五趣向く

〇大切關扉は關兵衛役是の早何度となく勤られ實はタコのみつてる得意の所作事何もなから甘い物で有升た

〇市川團若(石川染)三好長慶釜ヶ淵よ三二五郎兵衛二役とも相應の出来

〇中村雀五郎(遠葉與六)さしたる事なし〇堅田の小雀五苦勞く〇足利義輝公さつぱりとした大將なり

〇二番目お油屋多三郎役此突轉し可成にこなされ升たけ何分愛敬の無性故一向引立ぬやうよ見へ升何でも引請てする代り何でも同じ事來し不思議よペイ一氣は振て居ら升其上誰れも何とも云ぬも不思議な人なり

〇市川照藏(石川染)三上の百助五衛門手下よて壬生村へ出らるゝ端役五若勞く

〇小鮎の源五郎是亦釜ヶ淵の方の手下お瀧(多賀之丞)よ惚て口解と云か此狂言の騒ぎを引起す役唯のころつさおて盗人の手下めかぬは少し分なるが別て仕て見せる場も無役故斯な物か

〇逸野彌藤治役五右衛門釜入檢使の役さしたる事なし

〇二番目野崎村よお染の伯母おつね役此役の本文お染の母が出る處なるが(多賀之丞)お差合故伯母で行く趣向此役のちよいと當て居られ升た拵へも吉女の情合も有てよし此人の妙は調法な器用肌毎度加役で當りの有る感心

〇山家屋清兵衛役の(芝翫)新富町へ行よ差合故此人代つ

て勤られ升た別て役も無五苦勞な付合なれど一寸も上げ  
役分なく仕て居られ升た

○中村福助(石川染)治左衛門娘小多役此役は定めて可  
愛らしくて宜ろうと思ひおりしは何となく今一息と云處  
有て十分ならず存外な物で有升併し爰と云批難の有でも  
無先とまり役故上評と譽て置か

○尾上多賀之丞(石川染)よけいせの芙蓉役さしたる事な  
し五右衛門との出合何となく色氣薄く見へて残念併し相  
手よる物か

○五右衛門女房お瀧役此役は極難義な仕よくい役よて誰  
が仕なすつてもヤンヤと云ぬ役なるが先一ト通りや分な  
く仕られ升た持へも相應□針の遣ひ方女らしく無て悪  
し斯な事ハ堂でも能様お物の女房が引ずりよ見へて悪イ  
物なり能真似る様お心掛度物なり

○藤馬女房おりつ役内の場がなくて釜入斗り故さして評  
する處なし

○釜入ヶ切れると幕外へ向ふ揚幕茶屋の娘にてお客の  
(芝翫)羽織を持って出てちよいと氣を取た趣向が有升たが  
此娘は何となく不恰好にてチト譽兼升が今少し注意して  
賞ひ度處が有様です

○二番目お染よ油屋後家おみね役隅田川夢の場此役は親  
御(菊次郎)丈ヶ仕られ評判宜りしが(多賀)さんも相應よ  
のこなされ升たヶ親湯のハ云よ云れぬ甘味ヶ有て見て居  
ても大きよ氣ヶ悪く成た位(尤も此頃の舞臺の醜体を八  
ヶ間敷云ぬ時代なるヶ)次第よ酒よ酔て來て形崩れて  
赤い緋袴ヶ自然と見へる梅梅が(多賀)の襟よわざと出さ  
なくつて妙な處よ舞臺功ヶ有た物夫等ヶ我輩老記者の眼  
よ殘て居升から今回の今一息辭い處へ手ヶ届ぬ様な氣  
合(ヨット)濡場なれと味な處へ手ヶ届かぬ氣持か)有て感  
心し升んでした尤も相手の善六よもよる物か油屋の場ハ  
ほんの善六へのお付合の場なれとさしたる事なし

○久作娘おまつ役持へ万端申分なし在處娘の情合も十分  
有て吉此おまつハ野崎の狂言の眞捧おれと悪かつたら見  
て居られぬ場なれと中々宜して居られし故上評後尼よ成  
てからも随分まつとりと能こなされ請よし口誰ヶ仕ても  
斯なれどマンマとお染をグツて仕舞升た

○大切關扇よ小町姫まつとりと能出來升た下の卷墨染櫻  
の精少し幽靈の氣持ヶ有いせんかと思ふ處有ですが其腹  
のいかや併し(芝翫)丈に見劣りなく踊られしハお手柄  
な事例もあがら久松座の人氣取音羽屋の太夫様



○中村仲藏(石川染)農夫治左衛門壬生村の場此人の明  
 き盲目の不思議よ手よ入られた人あて真よ甘い物で有升  
 た五右衛門が悪心を欺き身の懺悔をとる處の答へ升て泪  
 が隘れ升た後五右衛門の跡追出て久吉よ押へらるゝ幕切  
 迄申分なし先治左衛門の方今此人で有升ふ  
 ○野崎の久作役辻番附の出る前が勤らるゝ噂さ成故定て  
 見物で有ふと樂しみにして居升たよかもひきやの物よて  
 此久作の大きよ不感心で有升た岩淵宗庵や今回の新富の  
 久平次の様な工合お行ぬ物よて大きよ解し兼升た是の  
 (秀鶴)丈の東京生ぬきの人なれば義大夫狂言の堂しても  
 腹よ無故でかな有升ふ我輩記者若年の頃なれを確との覺  
 へ升んぬ(故人嵐猪三郎)例の具足屋の何となくぼんや  
 けした處有て篤實かと思のれ升たけ全く跡よ無役だと思  
 へて見物を感伏させ升んでした残念〜○さて久松座の  
 評も是よて打留め先令回の相應な見物を引請られ升たの  
 全く坐頭の高名手柄お仕合かな〜

投書家人名

- |       |      |     |
|-------|------|-----|
| 琴通舍   | 立見小僧 | 壽喜田 |
| 尾躑子   | 明治道人 | 感々能 |
| 飯田町中村 | 横濱村川 | 五蘭庵 |
| 眞登丸   | 有賀   |     |

明治十六年二月九日

宛付於紙

出版御届

日本橋區堀江町二丁目

二番地平民

編輯兼出版人

植木林之助

新撰通志人 新木林文

二書後代目  
日本編纂部刊行

出典

御定十六年二月五日

真宗六年

新撰通志人

新撰通志人

新撰通志人

新撰通志人

